

Title	創立三十周年を祝う
Author(s)	古野, 秀雄
Citation	makoto. 1977, 20, p. 7-7
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/86163">https://doi.org/10.18910/86163</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 創立三十年を祝う

大阪府立公衆衛生研究所長

古野秀雄

貴協会におかれては本年創立三十年をむかえられ心より御祝ひ申し上げます。

一概に三十年と申ししても十年一昔のたとえのとおり長期にわたる努力の積み重ねであり、三十年の間必ずしも平穏な道程ではなかったことと存じます。

昭和二十二年五月に大阪府衛生部の外郭団体として産声をあげて以来、ただひたすらに防疫業務とその関連業務に精進され、今日に至ったわけでありますが、その間辻野直三郎理事長の卓越した指導力と「まこと」の精神をもって業務を遂行された努力の結果今日の財団法人大阪防疫協会の姿があるものと信じます。

さて私共公衆衛生業務に携わる者として防疫業務は重要な業務の一つであります。戦後の防疫業務の中で最も特筆されるものの中に日本脳炎が、重要な感染症の一種で、行政、研

究機関はこれに注目し各種調査研究がなされ今なお続いております。

日本脳炎は色々の蚊が媒介して人に感染するといわれています。日本脳炎ウイルスについては、我が国ではコガタアカイエカからの分離に成功しています。しかしその他のものからの分離等についても研究されています。現在自然界の媒介の主役はコガタアカイエカであります。

日本の大部分の地域では夏の流行をすぎると冬期には蚊や家畜からのウイルスは消滅し、つぎの流行期にウイルスの伝播は日本の南から北に向って移行するものといわれています。

冬期の脳炎常在地は日本の南東部にあるといわれておりますがウイルスの分離は困難です。

全国的に日本脳炎は昭和二十三年から約十年間大きな流行が続きましたが、以後次第に減少の傾向を見せ、昭和四十五年以

後は激減しております。今日の時点で、脳炎の減少がこのまま続き、やがて消滅してしまうのか、あるいはまた流行が起るかが関心の的になっております。油断は出来ません。

各地区の流行は、ウイルスの導入により、コガタアカイエカとブタの感染が起り、ウイルスが蔓延し、それに伴って人の流行が起ると考えられております。したがってこの流行には蚊の密度、ブタの管理、人の抵抗性が重要な因子となっております。

脳炎の防疫はコガタアカイエカの撲滅と予防接種の普及にまたねばならぬことは申すまでもありません。

疫病の遁滅により住民の関心はうすれ、また予防接種が全般的に見なおされている状況にある現状に於ては日本脳炎の将来対策については新しい見地から現状に即した手段を考えねばな

らない時期に来ていると思いません。

蚊の生息数の測定は困難であり、研究者は常に慎重です。

コガタアカイエカはだんだん減少の傾向にあるようです。

コガタアカイエカの幼虫は水田に生息し、水田が引続き十日以上湛水すると幼虫期の発育が完了します。

近年水田の水の管理は進歩し、意のままに水位を調節でき、また栽培法も変化し、湛水期間を短かくする地域もあり、コガタアカイエカの減少に役立っていることもあります。

また人の密集する都市周辺の水田は宅地造成で蚊の生息面積は減少し、また水田へ流入する水質の変化でコガタアカイエカの発生をおさえ、蚊と人の接触の機会を低下させていると考えられます。

また農薬用薬剤が蚊の密度を増加させている傾向はないようです。

ウイルスの増加をもたらすブタについてはその飼育法に変化が起り、多頭飼育が行なわれブタの管理もゆきとどき蚊との接触の機会が減少される傾向にあります。

脳炎の伝播に大切な蚊の密度、豚の飼育法、人の抵抗力の因子が現状では人への感染に不適に働いているが社会生活様式、農業方式、害虫駆除剤の選択などにより蚊の密度の変化は起りうるものであります。

また人の抵抗力の低下及びそのほか伝染性疾患の周期的流行など考慮すると脳炎はそのまま絶滅するとは考えられず引続き監視が必要であると存じます。

以上述べましたとおり、防疫対策とは実に困難なものであり常に監視しておかないと禍を後にのこす結果となります。この意味におきましても貴協会におかれては防疫業務の真髓を把握され、明るい健康社会の育成に努められ今一層のご精進を望み今後のご発展を祈りまして創立三十年のお祝いのごとばといたします。

